

内田康夫

輕井沢の霧の中で

中公文庫

中公文庫 ©1989

軽井沢の霧の中で

一九八九年八月二〇日初版
一九九五年五月二〇日7版

著者 内田康夫

発行者 嶋中行雄

本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替 00330-8434

ISBN4-12-201641-X

Printed in Japan

中公文庫

軽井沢の霧の中で

内田康夫著



中央公論社

目次

アリスの騎士^{ナイト}

7

乗せなかった乗客

75

見知らぬ鍵

141

埋もれ火

215

解説

小池真理子

287

輕井沢の霧の中で

アリスの騎士<sup>ナ
イ
ト</sup>

1

別荘を壊す時に土屋勉が泣いたのには、絵里は驚いてしまった。

「いろいろ、思い出がありますから……」

涙を見咎められると、勉は照れ臭そうに言った。

「思い出だったら、私のほうがいっぱいあるわよ」

絵里は笑った。絵里は二十六年前の夏、この別荘で生まれた。それから毎年夏には必ず来ているし、春も秋も冬も、折りにふれて訪れている。八年前に母親が亡くなったのも軽井沢の病院だった。ずっと別荘で療養生活を送っていて、最後の二週間ばかりを入院して死んだ。その時も絵里はほとんどつききりで母の最期を看とった。

ペンキの剥げ落ちた板壁やポーチやテラスのそこかしこには、釘の先で印をつけたいたずら書きと一緒に、幼い日々の思い出が刻み込まれている。フレアーのたっぷりした

ワンピース、大きなリボンを結んだつば広帽子、はなれやま離山の坂道を、自転車を押してついできた男の子は、あれは誰だったのかしら？——。

古い建物が次第に形を失ってゆくのは、母の臨終の時のように、愛する者を失う想いがある。せつかく停まっていた時計の針を動かすような、後ろめたさがあった。勉は、この辺りの別荘建築と、管理や補修を引き受けている土屋工務店の息子として、絵里より二年早く生まれた。いまは専務だとか肩書のついた名刺を持って、何人もの男たちを使っているけれど、子供の頃は幼いボディーパーガード役を兼ねて、絵里の遊び友達だった間柄である。

「また勉さんのところで建ててもらうんだから、いいじゃないの」

「はあ、そのことは、たいへんありがたいのですが」

商売人らしく、ペコリと頭を下げた。

「でも、あれですねえ、お嬢さんがペンションをなさるなんて、変われば変わるものですねえ」

「あら、私だってペンションの経営ぐらいできるわよ」

「いえ、それはそうですが、しかし、丸岸さんのお嬢さんが、そんな客商売のようなことを……」

世も末だ——と言わんばかりに、溜息をついた。

「丸岸」というのは根岸絵里の家の屋号である。根岸家は東京日本橋で四代つづいた呉服と染物の店で、絵里はその三人姉弟の末娘だった。

いちばん上が姉の夕紀で、夕紀は絵里と八つ違い、母親が元気な頃に嫁に行った。二番目が兄で、当然、丸岸の跡取りになるはずであったのだが、二年前に心筋梗塞で急逝した。

息子の死は父親にはショックだったにちがいない。そのせいではないのだが、父親もそれから僅か一年半あまりで、息子の後を追うように亡くなった。

亡くなる半年前、なかば強制的に絵里に婿養子を取る手筈を調えた。その相手が、現在の絵里の夫、嘉男である。

嘉男は美術大学を出て、日本画家を志す傍ら染色技術を習得しようと、丸岸呉服店の高田馬場工場にアルバイトのように勤めていた青年だ。それを、絵里の父親が見初めて、娘の婿に——と白羽の矢を立てた。画家の卵であり、家業にも興味を持ってくれるのだから、染屋の養子としてこれ以上の適任者は滅多にありはしない。それに、容姿も悪くなかった。実家は岐阜県で商売を営んでおり、嘉男はその三男坊。こっちはほうは大了したことはないけれど、なまじ素性のいいボンボンよりは、かえって商売の上では頼りになると思ったのだ。

父親は惚れ込んだが、正直なところ、嘉男は絵里の好みのタイプではなかった。嘉男

の柔弱にゆうじやくそうなところが食い足りない感じがした。それに、絵里には付き合っている男がいた。体の関係もあったし、結婚してもいい相手であった。もし兄が死ななければ、おそらくそういうことになっていただろう。

ただし、その男は養子になることだけは絶対だめということだった。先方はべつに商家でもないし、跡取り息子というわけでもないのだが、現在勤めている商社でエリートコースに乗っているとかで、商人の家に婿入りするなんて、まっぴらだと言った。最後には絵里は面倒臭くなつて、どっちでもいいわ——と父親に返事した。

もつとも、嘉男のほうもあまり気が進まなかったようで、父親の申し入れを何度も断つた。もしかすると、絵里と同様、ほかに付き合っている女性がいたのかもしれない。絵里の父親に、仕事のほうは娘に任せておけばいいから、あんたは絵の勉強に専念しなさい——と好条件を提示されて、それならということになったようだ。

結局、二人とも、父親の熱意にほだされた形で結婚した。父親はまだ初老にさしかかった程度の年齢だったが、それから間もなく、脾臓ガンで死んだ。婿取りを急いだのは、本人が病氣のことを知っていたからではないか——と、絵里はあとで思い当たった。

父親が元気でいる頃から、すでに日本橋の店は不振つづきで、先行きにも希望が持てない状況だった。「絵里に任せればいい」と父親は言っていたのだが、呉服業界そのものが難しい状態にあって、それをなんとか乗り越えていたのは、四代つづいた老舗しにせの信

用と、父親の才覚と情熱があつたればこそで、所詮、絵里の細腕やポツと出の嘉男なんかには無理な話だ。

絵里は商売に見切りをつけ、嘉男に軽井沢でペンションを経営しようと提案した。

嘉男のほうは東京に未練がありそうな様子だった。先生や画商や仲間がいる東京のほうが、絵を勉強するにはいいに決まっているという理由だ。

「それにさ、ペンションのオーナーなんかにならなかつたら、頭が丸くなって、芸術的センスも野心も霞んでしまいそうな気がするんだけどな」

一応反対はするのだが、絵里の目からみると、絶対的な抵抗という感じではなかった。逆に絵里は言い出したらきかない性格だ。

「何言つてんの、軽井沢はただでさえいいところだし、芸術家が住むには最高の環境ですよ。私はあなたのために行こうって言ってるんじゃないの」

絵里は叱咤激励するように言った。

「それに、深山幽谷に住むわけじゃないわ。軽井沢から東京までは特急で二時間しかかからないのだし、行きたい時にはいつでも行けばいいんだから」

オタオタしている嘉男をそっちのけで、店や工場の従業員を整理し、さっさと計画を実行に移した。事情を知った姉がびっくりして飛んできて、どういふつもりかと詰ったものの、絵里の決心は止めようがなかった。

日本橋の店は銀行の担保に入っていたりして、それほど価値はなかったけれど、高田馬場にある染物工場は、たまたま大手の不動産会社から、マンション用地として売ってくれないかという話があったところだったので、かなりの金額になった。軽井沢の別荘を壊し、ペンションに建て換えるには十分すぎるほどの価格だった。

その金を巡^{めぐ}って、また姉の夕紀とひと悶着^{もんちやく}あった。丸岸の店を勝手に処分するなんて、許せない——というのだが、本音は財産の分け前をどうするのか、そっちのほうに問題があるのは分かりきっている。絵里はほとんど姉の言い分を無視して通した。というより、姉が駆けつけた時は、すでにおせん立ては完了してしまった後だったのである。「とにかく、このままじゃ済ませないわよ」

姉はあくまでも「継続審議」の状態であることを念押しして、引き上げた。

2

別荘は、軽井沢駅から旧軽銀座へ向かう大通りの少し裏手の、いわばペンションとしては一等地とっていい場所にあった。土屋勉に言われるまでもなく、幼い頃の思い出が沢山ある別荘を壊してしまうのは、絵里には少し惜しい気もしたが、さりとて軽井沢で、ここに匹敵するようないい場所を探すとすると、もはや手が出ないほどの地価の高騰ぶりであった。

ペンションの名前は「アリスの館」とつけ、建物のデザインも、その名前にふさわしいようなものにした。

「碓氷峠のトンネルを潜って、パッと視界が開けると軽井沢でしょ。あれ、アリスが兎の穴に落ちて、不思議の国へ行くのと、よく似てるなって思ってた……」

軽井沢のこととなると、どうしてこう幼稚な発想になるのか、絵里は自分でもおかしくてならない。

（軽井沢に行けば私はアリス——）

だんだん仕上がってゆく建物を眺めては、絵里は子供の頃の夢の続きを見ているような気分に浸った。

土屋工務店は商売っ気抜きで、丁寧な仕事をしてくれた。専務の勉自ら、設計から現場監督、内装工事にいたるまで、細部にわたって気を配った。春先に始めた工事が、ゴールデンウィーク前までには完成し、あちこちの雑誌などに広告が出せる状態になった。嘉男は絵のことを別にすれば、ある意味では超然としたところがあつた。ものの役に立たない代わりに、絵里の決めたことに対しては、消極的な意見を言うくらいが関の山、大抵は何でも絵里の言うなりになった。

絵のほうに専念している——といえば聞こえはいいが、それほど没頭して仕事をするタイプではない。絵の勉強だ展覧会だと言っては、東京や、時には京都まで出掛けて、

何やらマイペースでやっている。絵里のほうも、そんな風に夫が気儘きままにやっていてくれるほうが、いっそ気が楽だった。

嘉男が頼りにならない分、周囲にはいくらでも面倒見のいい人たちがいた。土屋家の人々をはじめ、絵里を子供の頃から知っている隣人たちが、別荘を取り壊しにかかる時から、あれこれ手伝いに来てくれた。

従業員の世話から、料理の献立、客の扱い方まで、寄ってたかかって面倒を見た。呑み込みの早い絵里のほうも、ペンション経営のコツをどんどん会得えとくした。夏の中頃には、いっぱしのベテランのように振る舞うことができた。よほど性に合っているのだろう、絵里自身、客商売がこんなに楽しいものだとは、思ってもいなかった。

絵里の思惑どおり、「アリスの館」は若い女性の人気を呼んだのか、ペンション過剰といわれる中で、最初の夏から、客の入りは比較的順調だった。それに、無借金経営だったから、稼いだ分だけきちんと残って、将来的にもまったく不安がなかった。

「絵里は先を見る目があるね」

嘉男は若い妻の手腕に感心した。

「そういえば、お父さんのことも、ちゃんと言い当てたしね」

「パパのことって？」

「ほら、言ってたじゃないか、もう、あまり長いことないような気がしますって」